詩編 89 編―２の黙想（2023 年 0４月 19 日東福岡教会祈祷会奨励　松見俊）

メシアの選びと祝福
詩編 89:10－38

先回、この詩は１～19 節、20～38 節、39～53 節に区分されると言った。そして、先回は松見が自己都合で９節で切ったので、今回は少し長くなる。10～38 節を取り上げる。すでに指摘したことであるが、油を注がれた僕・王ダビデが棄却されるという 39 節以下のメシアの辱めの場面を心に刻みながら 10-38 節「メシアの選びと祝福」の箇所を味わってみよう。理想的支配者のイメージを思い、期待し、裏切られ、期待され、裏切ってきた人間の歴史とイエス様に行き着いた喜びを黙想しよう。

１．　天地創造の神・天地は主のもの（10～15 節）

地中海世界から新しい文明（ヒッタイトの鉄器文明）が押し寄せてくることもあり、「海」（塩水）はイスラエル民族には脅威であった。また、メソポタミアの創造神話の影響を受けたイスラエルは海を支配し、秩序を与える神を崇めることを部分的に受け入れた。また、当時は海や海水だけでなく「水」を制御することが政治的支配者の要件であった。これは日本の大名の場合も同じである。現在では、氷河どころか永久凍土が解け、ウイルスの伝播の脅威ほか、海水の水位が上昇しつつあるそうだ。波や海がその「境」を超えることは人に取って、そして、陸に生きる生き物には脅威である。そのような中で、詩人は「あなたは誇り高い海を支配し/波が高く起これば、それを静められます。」（10 節）と歌っている。また海で暴れる神話的怪物ラハブを神は打ち砕き、「刺し殺し/御腕の力を振るって敵を散らされました」（11 節）と創造の過去を回顧している。「天（不可視的被造物）も地（可視的被造物と世界）も主なる神のものである」（12 節）と神を賛美し、神自らが世界とそこに満ちるものの「基」を置かれたと言う。

ここでは東西は登場しないが、神は北と南を創造されたと言う。「タボル山」（ガリラヤ湖西南にある名高い山、588m）はイエスの変貌の山とされている。また、北部カナンのハゾルの王ヤビンの将軍シセラとの闘いにおいてイスラエル１２部族の内、イッサカルとゼブルン族の軍隊はこの山裾平野部に結集、布陣した。（士師記 5:14－15）チェコ（ボヘミア）のターボルはフスによる宗教改革の拠点となった街で、川に囲まれた要衝の地であり、ジシカ将軍がここで最後まで反宗教改革軍（ハプスブルク）と闘った。私は「タボル」という名の街が今日もあることに驚いた。「ヘルモン山」（アンティレバノン山脈の南の最高峰 2814m）はレバノン山（1850m）と並ぶ山で、万年雪を頂く景色は美しいと言う。新生讃美歌 107 の１節参照。「神の恵みは　いと高し　仰ぐ高嶺の　しらゆきに　朝

日匂える　ヘルモンの　山にもまさり　高きかな」。ちなみに、「北の果てなる氷の山」（教団讃美歌 214 はグリーンランドのこと）はヘルモン山のことではない。ヘルモン山とタボル山の、この二つの山は神の御名を喜び歌っていると言う。14 節～15 節は創造世界への言及か歴史的事柄を語っているのかは判然としないが、神の「力強い業をなす」御腕、力を振るう御手に言及し、神は右の手を高く上げられると歌っている。そして、例の重要な概念である、「正しい裁き」と「慈しみ」と「まこと」が登場する。世界支配の基礎・土台は正しい審判であり、神のみ顔の前に「慈しみ」と「アーメン」が先導するという理想の姿が語られる。今日の日本の政治や高級官僚の支配はこの 3 要素を欠いたものではないだろうか。

２．　いかに幸いなことか　（’ašrê 16 節～19 節）

16 節からの区切りは「いかに幸いなことか人びとは」で始まる。以下のことを「知っている民は」（幸いだ）と続く。それは、喜ばしい響き（叫び声）を知る人たちである。主よ、彼らは「あなたのみ顔の光の中を歩む」という。闇を照らし、あるいは、闇を駆逐する光、それは神の顔に輝く光でもあるが、光の中を歩む者たちは幸いであると謳う。経済的繁栄や政治的安定、身体的健康以上に、神の光の中を歩み、神のみ名においてひねもす喜び躍り、恵みのみ業（あなたの義）において引き上げられる者らは幸いである！そして、ここでも 4 番目の基礎概念である「義」（ツェデク）が登場する。もっとも「義」は「ミシュパート」の形容詞として 15 節に一度登場してはいる。新共同訳はここでも「あなたの義」を「恵みのみ業」と翻訳している。

そして、18 節において、神の民の力、そして角を高く上げてくれるように懇願する。民を導く王には信仰、慈しみと共に正義を「実現する力」が必要とされる。むろん、幸いな民の力の源泉、その力の輝き（栄光）は、主なる神ご自身である。その神のご好意によって彼らのあるいはわれわれの角は高く引きあげられる。羊であれ、山羊であれ、鹿であれ、牛であれ「角」の大きさ、立派さは力の象徴である。

次のパラグラフに繋がる要素として、「王」のイメージが 19 節に出て来る。民の幸いを保証するのは「盾」である主であり、この方こそ聖なる方、イスラエルの王、われわれの王であると謳う。

３．　一人の王の選び、油注ぎ（20 節～30 節）

主なる神が王であることはここでは地上での「代理的王」が立てられることで実現すると言う（サムエル記また預言者の伝統では王政（制）に反対し、神自らが支配されるという伝統もあるが)。それは「慈しみ」に生きる人々に示された幻によってすでにダビデに約束されたものである。ダビデは神の助けによって、力強き者であり、高く上げられ、民

の中から選ばれた者である。ダビデは神が聖なる油を注いでメシアとした人である。彼は、神であるわたしの「僕として」「わたしが見出した者」であり、神である私の手をもって彼を堅く支え、わたしの腕で彼に勇気を与えると約束されている。25 節「わたしの真実と慈しみは彼と共にあり、わたしの名によって彼の角は高く上げられる。」

神とメシアとの親しい関係は、彼が神に「わたしの父よ」(アビ)と叫ぶことによって実現し、「私の神」、「わたしの救い」の岩と祈ることに現われている。ローマ８：29 によれば、キリストは神との特殊な関係においては「神の独り子」であり、人間の兄弟姉妹との関係においては「長子」であられたように、このメシア王は地の諸王の中では「長子」であり、彼ら彼女らの中で最高位を与えられ、その領土は海にまで大河まで拡がるであろうと言われている。また、神は彼の子孫をとこしえに支える。その王座を天の続く限り支えるであろうと約束する。神は彼、彼らに対して「慈しみ」を持って関わり、彼との「契約」を神ご自身は確かに（アーメン）守るであろうと確約している。

４．　不従順への対応：威嚇（31 節～33 節）

神の側では選びと約束に忠実であってもダビデの子らが主の教えを棄て、掟、戒めを守らなければ相応の対応を覚悟しなくてはならない。西南学院の創設者ドージャー先生の言葉：安息日問題で辞任に追い込まれた時に、「西南よ、キリストに忠実なれ」と言われたと息子エドウィンは言っているが、日記に「もし、西南がキリストに忠実でないなら、これを滅ぼして下さい」と書かれていたとか！（天野有先生がそう言っていたことを記憶している)。

５．　それでもなお（34 節～38 節）

この部分はイスラエルの不従順、その王たちの不敬虔に対する神の呻きである。しかし「それでもなお」という言葉は原詩にはない。ただ「わたしは彼から完全にはわたしの慈しみを取り上げることをしないであろう」また「わたしの真実に失敗しないであろう」と言われるだけである。約束を破る事、唇から出た言葉を変えることはないと神は言われる。神はこれ以上高いものはないので、ご自身にかけてこの意志を誓うのである！ダビデ王朝は太陽のように、そして月のようにとこしえに立つ。

21 世紀 20 年代の、武力による野蛮な戦争、各地での諸暴力の行使による弱者への抑圧を思う時、もうこのような理想的指導者のイメージは、イエス・キリストの愛と慈しみ、そして正義とシャロームによる支配以外には期待しにくい世界である。